小児科だより vol.113

妊婦向け RS ウイルスワクチン定期接種化

2026.2.2 発行

こんにちは。今年も最も寒く乾燥する時期となり、小児科外来にはインフルエンザや新型コロナ、胃腸炎の患者さんが大勢受診されています。一番の予防は手洗いとうがいです。子供のお手本となるように、大人である我々が進んで感染予防に取り組みましょう。

小児科だよりも 10 年目に突入しましたが、小児科だより vol.1 は、『RS ウイルスのおはなし』というものでした。その後も vol.59 で再び触れておりますが、それほど RS ウイルスというものは、子ども（と家族）および我々小児医療に関係しているものにとって、重要といえます。この度、厚生科学審議会において、2026 年 4 月よりアブリズボ®（妊婦向け RS ウイルスワクチン）が定期接種（公費負担）となることが決まりました。現状は任意接種であり、自費で 3 万円以上かかるため、費用が接種のハードルとなることも考えられますが、費用の心配なく接種できるようになると、より多くの子どもとその家族が恩恵を受けるようになります。

アブリズボ®は、妊娠中のお母さんに接種することで、母体内で作られた抗体が胎盤を通して赤ちゃんに移行し、生後初期（特に最初の 6 か月）の赤ちゃんを RS ウイルスから守ることが期待されます。ワクチンの有効性として、生後 6 か月までの赤ちゃんの軽症の下気道感染症を約 50%減少させて、重症の下気道感染症を 70-80%減少させました。接種部位の軽い痛みや発赤などの軽度の副反応の報告がありますが、一時的なものであり妊婦さんや赤ちゃんに重大な副反応がないことが確認されています。

妊娠 24 週～36 週の妊婦さんが接種対象になりますが、妊娠 28 週以降の接種のほうが赤ちゃんの重症度を低下させることがわかっております。また、接種後 2 週間以上あけての分娩が望ましいため、子宮収縮や頸管短縮、早産の既往歴などある方はあまり遅くならないほうがよいでしょう。

現在の予定では、出産予定日が令和 8 年 4 月 23 日以降の方が対象になります。それ以前の方は定期接種の対象にはなりませんが、赤ちゃんとお世話する家族のために積極的な接種をお勧めしています。

アブリズボ®は、RS ウイルスへの感染自体を完全に防ぐものではなく、あくまで重症化を防ぐことが第 1 目的です。実際に母体へのワクチン接種を行い、当科を受診した早期乳児の例でも、入院を要する酸素飽和度の低下や哺乳量低下など認めませんでした。最後になりますが、RS ウイルス感染症の恐ろしさについては、過去の小児科だよりをご参照いただけますと幸いです。